

# 感染症と混合ワクチンの大切さについて

## 感染症から、愛犬・愛猫を守ろう！ 一混合ワクチン接種は忘れずにー

混合ワクチンの接種で予防できる病気は、感染すると生命を奪いかねない重大な病気も少なくありません。混合ワクチンを接種していれば、大事に至らないばかりか、周囲の動物からの感染、また周囲の動物への伝染も防ぐことが出来ます。子犬や子猫は、母親の初乳から、種々の感染症に対する抗体をもらいます（移行抗体）。しかし、この移行抗体は一時的なもので、この移行抗体の切れ頃が病気に対する抵抗力が失われる、たいへん

危険な時期なのです。しかし母親から譲り受けた免疫が少しでも残っている時期は、混合ワクチンを接種しても十分な免疫効果は期待出来ません。より確実に免疫を作るためには、初回の接種の後、1回～2回の混合ワクチンの追加接種を行います。その後は年に1回、定期的に混合ワクチンを接種します。動物を飼い始めたら、飼い主さんは忘れずに混合ワクチンを接種して、感染症から愛犬・愛猫を守ってあげましょう。

### 混合ワクチン接種で予防できる犬の感染症

犬には種々の感染症があります。狂犬病のワクチンは法律で義務づけられていますが、義務づけられていないとも一部の感染症は混合ワクチンで予防できるので、必ず接種してください。現在、研究開発が進み、何種類もの混合ワクチンが利用されています。

#### 犬パルボウイルス感染症

犬パルボウイルスによる急性伝染病で、伝染力が強く、死亡率の高い感染症です。腸の粘膜がひどくただれる消化器型と、急性心不全で突然死する心筋炎型があり、ほとんどは消化器型で、激しい嘔吐、下痢、白血球の減少が主症状で、感染した犬の便や嘔吐物、それらに汚染された食器、感染した犬に触れた人の手や衣類などから経口感染します。犬パルボウイルスは、チリやほこりに混じって長期間生存する、大変抗性の強いウイルスで、便の抗体検査での診断が可能です。

#### 犬システムバー

ジステンバーウイルスによって感染します。感染力が強く死亡率も非常に高い犬の代表的な病気です。空気感染と、ジステンバーウイルスに感染した病犬から直接うつる場合があります。一般に子犬が発病しやすい病気ですが、免疫のない老犬や成犬も感染する場合があります。感染すると初期は発熱、下痢、肺炎などの消化器と呼吸器の障害があらわれます。後期はてんかん様発作、後脳麻痺等の神経症状を示し、死亡する場合があり、回復してもてんかんなどの後遺症を残すこともあります。

#### 犬伝染性肝炎

犬伝染性肝炎は犬アデノウイルスによる肝炎です。発熱、食欲不振、嘔吐、下痢、口内に点状の出血などがみられます。肝臓や腎臓に大きな影響をおよぼし、黄疸、出血、腎不全を起こします。急性症では数日で死亡するケースもあります。

#### 犬パラインフルエンザ

パラインフルエンザウイルスなどのウイルスや細菌の混合感染によって発症します。咳、気管支炎、肺炎、または一般に「ケンネルコフ」と呼ばれる呼吸器系の疾患をおこすものとして知られています。伝染力が非常に強く、病犬との接触や、咳やクシャミなどから空気感染します。気管、気管支、肺に炎症をおこし、治りにくい咳が特徴です。

#### 犬レブトスピラ症

犬レブトスピラ症は、犬だけでなく他の動物や人にも感染の可能性がある伝染病で、細菌であるスピロヘータによって起こります。病原菌は尿中に排泄され、この病犬の尿と接觸することにより感染したり、ネズミの尿も感染源になります。症状には、黄疸の他に嘔吐、下痢、歯茎からの出血、血便などがみられます。手当が遅れると尿毒症を起こし死に至ります。屋外で飼育している場合は、犬舎の周囲を清潔にしネズミなどが徘徊しない環境をつくりましょう。

#### 犬コロナウイルス病

犬コロナウイルスによる伝染病で、激しい下痢と嘔吐とともにうつ腸炎がみられ、幼犬の場合は脱水を起こして急死してしまうことがあります。非常に感染力が強く死亡率が高いのが特徴で、感染した犬の嘔吐物や糞便で経口感染します。



### 混合ワクチン接種の時期と回数

#### 子犬の場合

生後2ヶ月の時期に1回目の接種をし、生後3～4ヶ月の時期に2回から3回の接種を行います。

#### 子猫の場合

生後2ヶ月の時期に1回目の接種をし、3ヶ月目に2回目の接種を行います。

#### 成犬・成猫の場合

年に1回追加接種し、予防効果を維持します。

※混合ワクチンの接種によって作られる免疫は、一生続くものではありません。健康状態や免疫力を考え、接種する混合ワクチンの種類、回数、時期など獣医師と十分に相談して実施してください。

### 混合ワクチン接種で予防できる猫の感染症

猫の感染症でよく知られているのは以下の7種類ですが、ワクチン接種で予防できるのは5種類です。かかると死に至るものや、慢性的に症状が出続けたりするものもあるので、混合ワクチンで予防できるものは接種しましょう。

#### 猫ウイルス性鼻氣管炎

猫の風邪と呼ばれる伝染病でヘルペスウイルスが原因で、感染猫のクシャミや分泌物などからうつります。鼻氣管、喉の粘膜、肺などの呼吸器系が冒されます。症状は、急に元気がなくなる、食欲がなくなる、発熱、鼻マズ、クシャミ、目ヤニなどが出ます。脱水や衰弱により死ぬこともあります。

#### 猫白血病ウイルス感染症

白血病のウイルスが原因の病気で、白血病だけでなく貧血や免疫不全、腎臓病などの病気の原因にもなり、猫の病気の中で最も重く複雑なものです。感染力は強くなり、ウイルスはほとんど唾液の中に含まれるので、軽い接触くらいでは感染することはあります。子猫が感染すると死亡率も高い病気です。

#### 猫汎白血球減少症（猫パルボ/猫伝染性腸炎）

感染力が強く、病原性も強いため、感染してから急速に症状がでることもあります。体力のない子猫や年老いた猫が感染すると、急速に衰弱し、死亡することも少なくありません。最初は食欲がなくなり、水を飲むことも出来なくなることが多く、腹痛のため腹部を触わられるのが嫌がります。白血球が極端に減少し発熱、激しい嘔吐、時として便便や下痢がはじまり、脱水症状をひき起します。感染猫との接觸だけでなく、感染猫の便や尿、嘔吐物で汚染されたものなどでも感染します。

#### 猫カリシウイルス感染症

猫のカリシウイルスによる病気で、猫のインフルエンザとも呼ばれます。クシャミ、鼻マズ、咳、発熱といった鼻氣管炎といたへんよく似た症状がみられます。さらに症状が進むと、舌や口の周辺に潰瘍ができ、気管支炎、結膜炎、肺炎に進行することがあります。猫のカリシウイルスは感染猫との直接の接觸で感染しますが、人の手、衣服、などに付着して感染する場合もあります。肺炎などに進行した場合、放置しておくと死亡することもあるので、早期発見早期治療を心がけてください。

#### 猫クラミジア感染症

クラミジアという細菌に感染することで発症します。主な症状は粘着性の目やにを伴う慢性持続性の結膜炎です。また、くしゃみ、鼻水、咳など風邪のような症状が現れます。また、気管支炎、肺炎などを併発し、重症になった場合には死亡してしまうこともあります。感染は感染猫との接觸によるものです。



### 混合ワクチン接種で予防できない猫の感染症

混合ワクチン接種では防ぐことができない、猫の感染症は、発症すると死亡率も高い病気です。これらの病気の感染を避けるには、感染の恐れがある他の猫との接触を避け、室内で育てることが予防になります。

#### 猫免疫不全ウイルス感染症

猫エイズウイルス（猫免疫不全ウイルス）の感染によって発病します。人のエイズとは全く別の病気で、人や他の動物に感染することはありません。発症すると免疫がきちんと働かなくなり（免疫不全）、体の抵抗力が弱まります。そのためさまざまな二次的な病気にかかりやすくなります。感染しても重い症状が出るまで長い時間がかかるため、飼い主が感染に気づくのが遅れてしまうことも少なくありません。また、このウイルスに感染していても発症していない猫もいて、無症状キャリアと言って区別しています。感染は感染猫とのケンカなどでの咬み合から感染する可能性が高いとみられています。つい最近、猫エイズのワクチンが発売され実用検討中です。

#### 猫伝染性腹膜炎

この病気は、猫伝染性腹膜炎ウイルスによって感染して発病します。初期の症状は食欲がなくなったり、発熱がみられたりします。典型的な症状は猫の腹が異常に膨らんでいます。重症になると腹水や胸水、黄疸の症状が出たり、他の臓器もおかされます。感染猫とのケンカなどでの咬み合から感染する可能性が高いとみられています。

参考資料： ペットの家庭医学イヌ（同健同人社）

ペットの家庭医学ネコ（同健同人社）

病気の知識としつけ方（西東社）

犬の医・食・住（動物出版）

猫の医・食・住（動物出版）

イヌの病気百科（Gakken）

ネコの病気百科（Gakken）

ドクターズアドバイスベビィ（peppy）

アドバイス 千歳市 ガイア動物病院

獣医師 南 恵先生